



おねがい
武田こうじ
ひとつひとつを
みつめていたい
みんな
だいじょうぶ
といえたら
いいのに
このてのとどくところに
ちいさなあかり
みらいに
かえりたい

ここはどういう場所で、どんな暮らしがあったのだろう
地域資源を再発見／再認識／再考する



仙台港を背に南を見る。ここには住宅が建ち並んでいた。

〈仙台市 中野字高松〉
集まって支え合う暮らし



この地域を
知るための
メモ

仙台市宮城野区
なかのあざ
中野字
たかまつ
高松地区

3.11 その時
海岸線から約1.2kmにある仙台市立中野小学校がこの地区一帯の指定避難所だった。震災当日は学校に残る児童に加え、周辺の地域住民もこの徒歩圏内にある唯一の指定避難所を目指して集まったため、校内は600人を超える市民で溢れた。太平洋側から押し寄せる津波、そして七北田川を遡上する津波が小学校を襲った。「2階建ての校舎の2階の高さよりも上に波が見えた」と屋久さんは語る。校舎から津波を確認してからは、避難者同士で必死に声を掛け合いながら屋上へ避難した。ただ、声を届けることができなかった体育館やグラウンドでは犠牲者が出てしまった。

中野高松は、七北田川の左岸、仙台港の東南端にある80戸ほどの集落です。東側にはコイの養魚場があり、さらに海側には野鳥の集まる蒲生干潟が続いていました。海まではわずか600メートル。大津波は集落を飲み込み、甚大な被害を与えました。

いま想像するのはなかなか難しいですが、仙台港のあるエリアには、昭和30年代まで広々とした水田が広がっていました。一帯は旧中野村で、中野高松もその一部でした。こうした水田は、藩政時代に盛んに進められた新田開発によって生まれたものです。中野村の米の生産高は、藩政期初頭の『元禄郷帳』では1550石ほどでしたが、幕末に近い『天保郷帳』では2748石に増え、いかに開発がめざましかったかが想像できます。

藩政時代、この一帯では大規模な土木工事がつぎつぎと行われました。藩政期初頭には、岩切から大代（現多賀城市）を経て湊浜（現七ヶ浜町）に注いでいた七北田川を、岩切で南下させ蒲生へ流す工事が着手されました。また、蒲生から塩竈湾の牛生（現塩竈市）まで7キロの御舟入堀を築き、さらに蒲生から苦竹まで御舟曳堀が開削され、塩釜から仙台北下までの物資輸送の水の道が整えられたのです。工事は、藩の財政を預かっていた和木織部と土木技術者の佐々木伊兵衛によって進められました。どちらも、寛文年間（1661～73）に竣工したようです。

御舟入堀が完成すると、両岸には砂防、潮上げのためのクロマツが植林されていきました。安永年間（1772～80）に記された『安永風土記』

には寛文年間（1661～73）に植林された「須賀松御舟入堀」として「須賀松御舟入堀」として、享保17年（1732）に植林された「須賀松御舟入堀」の名が記されています。明治以降は、農商務省営林課に植林が受け継がれ、さらに地元の人々が海際の土地の払い下げを受けて、たゆまず植林を続けました。

今回の取材で多くの方が口にしていたマツ林からの恵みは、こうした人々の営為がもたらしたものです。山菜やキノコといった食材だけでなく、松葉や倒木は、身近に得られる貴重な燃料になりました。

中野村は明治22年（1889）に、田子村、岡田村、福室村、蒲生村と合併し高砂村となり、このとき中野村は5行政区に分けられ、それぞれ甲、乙、丙、丁、戊と名付けられました。これらの名称は、その後、町内会名として使われた時期もありましたが、中野高松が含まれる戊区は近年になって読みにくいとの判断から、港町内会と名称を変えています。

【参考文献】
・仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編3近世1』仙台市、2001年
・寺嶋修二『高砂の歴史』高砂老人クラブ連合会、1984年
・角川日本地名大辞典編纂委員会『日本地名大辞典 4宮城県』角川書店、1979年

「思う／考える／おしゃべりする会」vol.2 2012年11月3日（土）18時30分より せんだいメディアテーク2階会議室にて開催

本号で初めて宮城野区の被災地を訪ねました。当初は「蒲生」という地区を対象にする予定でしたが、住民の皆さんに話を聞いていくうちに、「蒲生」という名前では一括りにできない、それぞれの集落の細やかな物語が浮かび上がり、変則的ではありますが、小字名による編集となりました。

昭和39年に、仙台湾地区が新産業都市の指定を受け仙台港の工事が始まると、大規模な集落移転が行われ、集落の多くが姿を消しました。このとき、中野高松でも、土地を手放し農業をやめて働きに出た人が少なくありません。マツ林が伐採され、林の中に鎮座していた高砂神社も、現在地に移されたのです。一方で、用地買収によって得た賠償金によって多くの住民が家を建て替え、暮らし向きがよくなったのも確かなことでした。

こうした大きな変化をくぐり抜けた人たちが、いま、再び、大震災による激変に立ち向かっています。



▲現在の高砂神社。被災により社殿を失ったが、同じ名称が縁となって高砂神社（兵庫県高砂市）から仮本殿が寄贈された。

編集後記

本号で初めて宮城野区の被災地を訪ねました。当初は「蒲生」という地区を対象にする予定でしたが、住民の皆さんに話を聞いていくうちに、「蒲生」という名前では一括りにできない、それぞれの集落の細やかな物語が浮かび上がり、変則的ではありますが、小字名による編集となりました。

今回は
2012年11月ごろに
発行予定です。
ウェブサイトも
ぜひご覧ください。

